特集ルポ

「熊本地震から１年」

「平成28年熊本地震」。あれから１年を迎えるのを前に、再び熊本県の被災地を訪ねた。息子を亡くした両親と出会った記者は共に遺体発見現場となった阿蘇へ。また、別の記者は震災直後のボランティアの炊き出し中に取材した被災女性と仮設住宅で１年ぶりの再会を果たした。被災地で聞いた２つの「声」を届ける。

犠牲大学生の両親と現場・阿蘇大橋へ

「報道のおかげで見つけられた」

大和　卓也さん、忍さん夫妻
（阿蘇市・満徳寺門徒）

熊本教区の物故者1周忌追悼法要で遺族席に座る男女の姿があった。阿蘇市・満徳寺門徒の大和卓也さん(57)、忍さん(49)夫妻（写真）。大学生だった次男の晃さん(当時22)を亡くした。

晃さんは4月16日の本震で行方不明となり、約4カ月後の8月12日に遺体で発見されるまで、「唯一の安否不明者」として報じられた。

法要後、卓也さんは「晃が見つかったのは記事を書き続けてくださった報道関係者のおかげ」と話し、忍さんは「私たちは満徳寺さんの仏前で結婚式を挙げ、晃が生まれた時も初参式をしてもらい、住職さんがお寺を継がれたときにはお稚児さんに参加した」と、寂しげなまなざしでご本尊を見つめた。

夫妻は、晃さんの遺体が発見された現場に案内してくれた。

◇

その場所は、崩落した阿蘇大橋のすぐ近く。付近は大きく崩れ山肌がむき出しとなり、土砂崩れのすさまじさを物語っていた。晃さんは橋から約400㍍下流の川岸に埋もれた車の中から発見された。

「なんとか見つけて、家に連れて帰ってやりたい」。その一心で、夫妻は勤め先に長期休暇を申請、毎日、ここに通い、立入禁止となった土砂崩れの現場近くで晃さんを捜し続けた。行政による捜索は、二次被害の危険などから、すでに打ち切られていたが、夫妻はひたすら捜し続けた。

晃さんが発見された谷底を見つめる卓也さん

約3カ月後、晃さんが乗っていた黄色い車が見つかった。そして、その半月後の8月12日、晃さんが見つかった。

地震から1年が経った。卓也さんは、晃さんが発見された谷底を見つめながらつぶやいた。

「見つけてやることができたという思いと、亡くなってしまったのだという事実。まだまだ、現実を受け入れることができていない」

◇

昨年4月15日。

晃さんは、祖父母とともに前震で傷んだ自宅横のビニールハウスを修理し、熊本市内の友人に水と食べ物を届けるため、車で向かった。

その帰り道。

阿蘇大橋を渡っている時に土砂崩れに巻き込まれたと見られている。

卓也さんは「16日にコメの籾(もみ)まきをしようと、晃と約束していた。責任感の強い子で、早朝の作業に間に合うようにと深夜に車を飛ばして帰ったんだと思う。それが、こんなことになってしまって」と肩を落とした。

◇

卓也さんは「捜索を続ける私たちに寄り添い記事を書き続けてくださった報道の皆さんには本当に感謝している。紙面を通して多くの方が心配してくださり、協力してくださったおかげで晃は見つかったんだと思う」と、自らに言い聞かせるようにつぶやいた。

ボランティア女性と再会「あの日から」を聞く

森　智子(みちこ)さん
（益城町・浄恩寺門徒）

「だれかが喜んでくれるだけで」

地震発生直後、熊本や大分の被災寺院や公共施設で炊き出しを行う本山職員のボランティアチームに同行し、本紙も取材を重ねた。地震の被害が甚大だった熊本県益城町。避難場所になっていた高齢者施設「ひろやす荘」で一人の女性に出会った。

森智子さん（64、同町・浄恩寺門徒）。自宅が全壊し、この施設に身を寄せながら、炊き出しの配膳を手伝っていた。そして、高齢の住民や疲弊する施設の人たちを笑顔で気遣っていた。不安に沈む避難所の中で、周りを元気づけるその姿が印象的だった。

今、仮設住宅に暮らす森さんを訪ね、彼女の「あの日から」を聞いた。

◇

森さんは仮設の部屋に案内してくれた。

「被災して人と人とのつながりは宝物だとあらためて感じた」と森さんは切り出した。

あの時の避難施設は、地震後すぐに町民に開放され、一時は400人余りが避難したが、指定避難所ではなかった。満足に物資が行き届かず、森さんは夫の榮太郎さん(70)と他の避難所などを回り、余っている物資を譲り受けたり、ボランティアの手伝いなどを買って出るようになった。

「被災していても、できることは自分でしたいし、みんな心が沈んでいるから、だれかが喜んでくれるだけでうれしかった。手を差しのべてくれる方々への恩返しの気持ちもあった」。その中で再認識したのが、「人と人とのつながりの大切さ」だった。

本山職員の炊き出しがあったのは、その最中。「冷たいご飯や缶詰ばかりの時に、とてもありがたかった。遠く京都のご本山から駆けつけてくれて、身も心も本当にあたたまった。多くの方の支援が、まるで阿弥陀さまのように包み込んでくれ、つらい時も仏さまが見守ってくださっていると考えるだけで、心が安らいだ」。つながりの温もりを実感した出会いだった。

◇

森さんはその後、避難所を転々とし、テントや段ボールベッドでの生活が半年続いたという。「夫と2人、悠々自適の年金生活を始めるつもりが一瞬にして崩れてしまった。避難所では水や電気に不便し、何カ月も同じ服で過ごさなくてはいけなかった。涙が止まらなくなるので、あまり振り返らないようにしてきた」

ようやく落ち着きを取り戻しはじめたのは、今の仮設に移った10月頃。ご近所とは離ればなれになったが、元のコミュニティーのつながりを大切にしたいと、益城町の人たちとの自治体活動には参加し続けた。

自宅を解体し、同じ場所に新居を建てた。来月には、1年ぶりにわが家に戻ることができる。「本当に大変な1年だったが、おかげさまで今こうして生かさせていただいている。『つながりを大切に』、ここからが私たちの再出発」。穏やかな笑顔になっていた。